

報告

『聞き書きマップ』を活用した子どもの育みについての一提言

A Proposal for Utilizing the "Kiki-Gaki Map" (Listen - Write Map) to Improve the Environment Surrounding Children

野村 和樹¹⁾ 岡 健司¹⁾

キーワード：子どもを取り巻く環境、安全点検地図、伝承地図、貝塚学

1. はじめに

子どもの健やかな育みに、環境が大きく関与することは論をまたない。子どもの育みに関わる環境は、大人が整備して与えるだけではなく、将来の自立に向けて子ども自らが構築できるようになることも重要だと考えられる。子どもが巻き込まれる事件や事故が後を絶たない今日にあっては、第一に安全な環境、次いで子どもが孤立しない環境が、育む場として不可欠である。

本報告では、身近な地域の地図作成を通して、子どもが自ら育める環境を構築する手段を提案したい。

2. 安全点検地図の作成を通した子どもの育み

子どもが危険にあいにくい環境は、社会資源を活用し、大人たちが力を合わせて作り上げることが求められている。しかしながら、地域に潜んだ問題を視覚化することは、子どもたちが

主体となって行うことができると考える。安全点検地図の作成はその一例である。これまでに、『聞き書きマップ』を用いて子ども自らが安全点検地図を作成した事例が報告されている^{1,2)}。

『聞き書きマップ』とは、科学警察研究所の原田豊らにより、身近な地域の安全を守る取り組みのために開発された安全点検地図を作成するフリーソフトウェアであり³⁾、Windows版、Android版、iOS版がリリースされている。

『聞き書きマップ』を用いた安全点検地図は、倒壊の危険性のある建物、盗難にあいやすい場所、交通事故が多発している場所などの情報を収集することで作成される。安全点検地図の作成にあたって必要となるのは、市販のGPS受信機、ICレコーダー、デジタルカメラのみである。歩いた経路はGPS受信機によって自動的に記録され、写真を撮った場所も、GPSのデータを使って自動的に判定できる。また、紙にメモを取るかわりにICレコーダーで音声を記録しておく、写真の撮影時刻を目印にして、必要な音声記録を自動的に呼び出せるようになっている。Android版『聞き書きマップ』やiOS版『聞き書きマップ』を使うと、スマートフォンを持ち歩くだけでデータの記録が可能となる。

Kazuki Nomura

E-mail : nomurak@kawasakigakuen.ac.jp

1) 大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部

2018年9月25日受付、2018年11月29日受理

この『聞き書きマップ』の開発にあたっては、次の3点が重視されている³⁾。

- (1) 安上がりであること（とくに、維持経費がかからないこと）
- (2) 現場の省力化に役立つこと
- (3) これまでの地図づくりのやり方を、なるべく変えないこと

こうした利点から、『聞き書きマップ』は、子どもによる安全点検地図の作成に適していると考えられる。

3. 『聞き書きマップ』を活用した安全点検地図作成の実際

『聞き書きマップ』を用いた安全点検地図の作成は、すでに様々なところで行われている。たとえば原田⁴⁾は、首都圏のある県にある小学校と共同で、小学校4年生にGPS受信機、ICレコーダー、デジタルカメラを持たせ『聞き書きマップ』を用いた安全点検地図の作成をおこなっている。この小学校4年生は、『聞き書きマップ』の機能を使い安全点検地図を作成したところ、主体的に学ぶ楽しさを味わい、自信をつけたと報告されている^{3,5)}。

子どもたちが安全点検地図を作成するにあたっては、収集したデータを『聞き書きマップ』を用いてプリントアウトし、子どもたちの自由な創意工夫も発揮できるよう壁新聞のような紙媒体で発表することが推奨されている⁴⁾。

首都圏のある県で『聞き書きマップ』を使い安全点検地図の作成をされた学校の先生73名にアンケート調査をされた結果、「これまでの地図作りよりも手間が省ける」に「そう思う」と回答した人が約7割であった⁴⁾。また、「子どもの事故や被害防止に役に立つ」や「通学路の安全点検に役に立つ」に「そう思う」「ややそう思う」と回答した人の合計も、9割を超えていた⁴⁾。

ただし、これらの先行事例においては、子どもたちの感想について報告されておらず、運用に際しての特長や改善点が明らかであるとは言いがたい。そこで筆者らは、実際に『聞き書きマップ』を用いて本学の所在地である貝塚市における安全点検地図の作成手順を確認することで、『聞き書きマップ』の改善点や応用の可能性について検討することを試みた。

危険な場所を調査することの実態を知ること、および途中で出会った人にたいして、付近でひやっとされたことをインタビューすることを目的として、GPS受信機、ICレコーダー、デジタルカメラを持ち、貝塚市内を3回に渡り歩いた。

第1回は、2018年9月6日木曜日15時30分～16時30分に実施した。貝塚市立A小学校区を歩いた。街路樹や看板の倒壊が確認されたが、前々日に台風が近畿地方に上陸したことが影響していたと考えられた。道行く人の姿は無かった。幹線を走行する車の数も少なく、信号待ちをしている車の数は少ないときは2台、多い時でも9台であった。

第2回は、2018年9月7日金曜日16時～17時。貝塚市立B小学校区を歩いた。特に危険を感じた場所は無く、インタビューでの情報収集に期待したが、人との出会いは無かった。車の通行量は、幹線道路ではないこともあって少なく、信号待ちをしている車の数も0～4台と少なかった。

第3回は、2018年9月13日木曜日15時～16時、貝塚市立C小学校区で行った。この地域でも、特に危険を感じた場所は無かったが、地元の人との出会いも無く、インタビューによる情報収集は行えていない。幹線道路で信号待ちをしている車の数は、少ない時は2台、多い時でも7台であった。

以上3回ともに、特に危険と感じた場所は無かったが、人と出会う機会がなく、インタビューが行えていないため、情報収集は十分ではない。しかし、通行人に限らず幹線道路を通行する車

の数も少なく、信号待ちで停車している車両数も少ないときは0台、多くても10台に満たない数であるという成果を得た。人、車とも通行量が少ないということは、危険を感じた時に助けを求めることができないということである。また、幹線道路沿いでは、民家も少なく、助けを求める場所もないということになる。

記憶に新しいところでは、2018年5月7日に新潟市で、小学2年生の女兒が車で連れ去られ殺害されるという事件がおきている。2017年3月24日には、千葉県松戸市で小学3年生の女兒が車で連れ去られ殺害されるという事件が発生している。これらの事件は、人通りのない場所で発生したものである。筆者らによる3回の調査から、貝塚市内の幹線道路は、少なくとも曜日や時間帯によっては人通りがほとんどなく、小学生に限らず一人歩きは危険に遭遇する可能性があるということが推測される。

ただし、「安全点検マップ」の公表については、配慮を要する。その理由の一つは、危険な出来事のある場所を表示することは、否定的な情報として地域に流布してしまうことである。特定の場所に負のレッテルを張られることにより、他の問題を引き起こす可能性を含んでいる。そのため、特定の地域の公表については、慎重に吟味する必要がある。原田⁶⁾は、危険な場所を示したものは、たとえば地元の関係者だけで共有する「そっと直そう」マップにすることを勧めている。本報告においても、調査地の具体的な場所の明言は避けることとする。

筆者らによる今回の調査から、ある地区を一度歩いただけで危険な場所を特定することは困難であると考えられた。調査する曜日、時間帯によっても、得られる情報は変化しうる。出会った人とのインタビューが極めて有用となることが推測された。

また、先行事例での『聞き書きマップ』の運用では、出会った人や車の数に着目されていないが、

人通りについての情報は、安全点検地図の作成において重要であるということを提言したい。

4. 『聞き書きマップ』の「伝承地図」作成への応用の可能性

前項における筆者らの安全点検地図作成の過程で、ある場所に実際に足を運ぶことで、単に危険であるか否かだけではなく、その場所への関心が引き出されることを経験した。『聞き書きマップ』は、危険な場所を知るための安全点検地図だけでなく、多様な地図作成に応用できると考えられる。

実際に地図の作成をおこなった小学生は、自らテーマを定め、そのテーマに即した対象を選んでインタビューを実施し、安全点検地図の作成に留まらず地域の理解へと『聞き書きマップ』の用途を拡大している⁴⁾。たとえば、地域在住の高齢者から、その地方の過去の災害情報を教えていただきそれをまとめる。「子ども110番のいえ」をたずねて交流を深める、といったことを試みている。また原田⁶⁾は、楽しいところを撮影した写真を「お宝」マップとしてウェブページで広く公開することも提唱している。

本報告では、子どもたちが自ら貝塚に語り継がれている伝承を見つけ出す機会を設け、伝承が記された地図を作成するという、発見を体験するプログラムを考えてみたい。

貝塚市においては、貝塚市教育研究センターが、「貝塚学」の推進を平成30年度研究の対象の一つに挙げている⁷⁾。その内容としては、「貝塚市の自然、歴史、文化を学ぶことで、郷土に愛着を持ち、学び育ったことを誇らしく語ることのできる子どもを育成するために、貝塚学を展開していこうと計画されている。『貝塚・発見伝-貝塚学-』というテキストが貝塚の先生方と一緒に作成されている。このテキストを使って、より貝塚のことを知り、大好きになっ

てもらえるような授業を作って参ります。」とされている。また、貝塚学こども講座が開催されており、参加者を募り、「家族で望遠鏡を作る」、「和泉葛城山登山」、「カニ釣り親子体験」等のイベントが行われている。

貝塚学の内容にあげられている「郷土に愛着を持ち、学び育ったことを誇らしく語ることでできる子どもを育成」することに『聞き書きマップ』を活用し、さらには、子どもが自らを育むことに展開できるのではないかと考える。

まず、公民館を、子どもたちへの情報を発信する場所とすることを考えたい。公民館が所有している社会資源から、子どもたちに発信できる情報を整理し小学校に伝える。小学校は、提供された情報を子どもたちに伝え、子どもは興味のある情報を選び、校区にある公民館に出向き貝塚市に伝承されている話をしてくれる大人を紹介してもらい、GPS受信機、ICレコーダー、デジタルカメラを持ち、話を聞きに行く。可能であれば話に出てくる場所まで一緒に出向いてもらいデータを収集し、それをもとに、『聞き書きマップ』を用いて「伝承地図」とでも呼べる地図の作成をする。作成した地図を用いて発表会を開催する。

公民館は主に成人を対象とした講座の開催等で活用されているが、子どもにとって、公民館に出向くことが増えると身近な存在となり、家庭、学校以外の新たな居場所となる可能性もある。話を聞くことで新しいつながりが構築されると思われる。

このプログラムを行うには、学校教育と社会教育の連携が求められ、その連携が子どもを取り巻く環境の向上につながる。このことは地域における絆を強める結果となり、ひいては、子ども自身が子どもを育む環境を整備、構築することにも貢献できると考える。

子ども自らが『聞き書きマップ』を活用し、地域の安全点検地図や伝承地図を作成することにより、おとなと関わりながら身近な地域を知ることができる。これらの地図作成は、子ども

自らが主体となった健やかな育みにつながるのではないかと考える。

[引用文献]

- 1) 原田豊：『聞き書きマップ』とは(原田豊編著：『聞き書きマップ』で子どもを守る 科学が支える子どもの被害防止入門)．現代人文社，pp.2-11, 2017.
- 2) Harada, Y. : Laying the Groundwork for Testing Routine Activity Theory at the Microlevel Using Japanese Satellite Positioning Technology. In: Liu J., Miyazawa S. (eds) Crime and Justice in Contemporary Japan. Springer Series on Asian Criminology and Criminal Justice Research. Springer, 2018. pp.137-151.
- 3) 原田豊：『聞き書きマップ』による安全点検まちあるき実施の手引き．予防犯罪学推進協議会，2015. <http://www.skre.jp/nc2/index.php?action=multidatabase_action_main_filedownload&download_flag=1&upload_id=134&metadata_id=14>. [accessed 2018 -11-16]
- 4) 原田豊：『聞き書きマップ』の教育力(原田豊編著：『聞き書きマップ』で子どもを守る 科学が支える子どもの被害防止入門)．現代人文社，pp.48-70, 2017.
- 5) 吉田徳子：小学校における『聞き書きマップ』づくり(原田豊編著：『聞き書きマップ』で子どもを守る 科学が支える子どもの被害防止入門)．現代人文社，pp.95-105, 2017.
- 6) 原田豊：よりよい活用のために(原田豊編著：『聞き書きマップ』で子どもを守る 科学が支える子どもの被害防止入門)．現代人文社，pp.138-153, 2017.
- 7) 貝塚市教育研究センター：貝塚学．貝塚市教育委員会，2018. <http://www.kaizuka.ed.jp/weblog/index.php?id=kaizuka98&type=2&category_id=761&date=20180301>. [accessed 2018 -11-16]